

封筒を受け取ったのは、三日前のことだった。

差出人は「医療法人 白澄クリニック」。中に入っていた紙には、ただ一行。

『先日の健康診断の結果、精密検査が必要と判断されました。下記日時にご来院ください。』

そして今、その下記日時である朝、病院の前に立っていた。

(精密検査って、何か悪いところがあったのかな……)

緊張しつつも自動ドアをくぐると、受付の女性がにこりと笑った。

「こんにちは」

「こんにちは、あの、手紙をもらって……」

「藤本なつめさんですね。お待ちしております」

「は、はい」

「では、担当の医師にお繋ぎします。少々お待ちください」

待合室の椅子に座って、なつめはぼんやりと手元を見た。

二十四歳。独身。人付き合いが苦手で、健康だけが取り柄だと思っていた。そのはずだったのに……。

「藤本さん」

顔を上げると、廊下の奥から男が歩いてきた。白衣。眼鏡。そして——ひどく大きな体。百八十センチは優に超えていて、肩幅が扉に収まるかどうかというくらい横に広い。筋肉の塊みたいな体格なのに、顔だけ見れば大型犬みたいな甘くて穏やかな美貌で、眼鏡越しの目がやわらかくなつめに向けられていた。

「担当医の眞人です。よろしくお願いします」

にこりと笑う。白い歯が見えて、あどけなさすら

感じる。

「……よ、よろしくお願いします」

「はい。こちらへどうぞ」

案内された検査室に入って、椅子に腰かける。

「今日から精密検査を始めます。いくつか気になる所見がありまして」

「き、気になる所見……？ でも私、体感的には特におかしいところは……」

「婦人科的な問題の可能性が 있습니다」

「え、婦人科……って、その……。どのくらい、悪いんですか……？」

「いえ、まだどこが悪いかは決まっていません。もしかすると、検査のエラーかもしれません。なので今日しっかり確認しようと思います」

「そ、そうなんですね」

「はい。どちらにせよ、命に関わるような重篤な症状ではないので、そこはご安心なさってくださいね」

真人先生がもう一度、穏やかに笑う。その笑顔に、なつめはまたほっとした。

「……は、はい」

「では少し準備を。すぐ戻りますね」

真人先生が部屋を出る。なつめはその広い背中を見送って、ひとり天井を見上げた。

（そんなに重くないなら、良かった……。でも、婦人科の検査なら、どうせなら女の先生が良かったな……）

でもそれより、さっきから頭にあるのは別のことだった。

（真人先生……すごく、優しそうな先生だなあ……）

「失礼します、藤本さん」

真人先生が戻ってきたとき、後ろに二人の男を連れていた。

一人は長身の無表情な男で、タブレットを手に持ちながらなつめを観察している。目鼻立ちは整っているのに、視線だけがひどく分析的だ。名札には「光」とある。

もう一人は、真人先生のように顔にはにこにこした笑みが浮かんでいて、一見すると人当たりがよさそうに見える。ただ、その目の奥には、どこかひどく楽しそうな光が浮かんでいて、ただ優しいだけのタイプには見えなかった。名札には「汐乃」とある。

(三人とも……すごいイケメン……)

なつめはひとり内心で感心しながら、三人の顔を交互に見上げた。

「検査の補助として、この二人にも立ち会ってもらいます」

「え、三人で……？」

「精密検査ですので、複数人で確認する必要がありますから。怖くないですよ」

眞人先生がにこりと笑う。

「……は、はい」

「では始めましょう。検査台の上で仰向けになって、膝を立ててください」

言われるままに横になる。検査着の裾がめくり上げられて、素肌に空気が触れた。なつめの心臓がドキドキし始める。

「……あの、」

「なんですか」

「婦人科検査って、具体的にどんな……」

「直接確認します。おまんこの状態を、詳しく診察しますね」

なつめは全身の血が顔に集まるような感覚を覚え

た。

「お、おまんこの、検査ですか……でも、あの……」
「大丈夫ですよ。ゆっくりやりますから、力を抜いてください」

真人先生は穏やかにそう言いながら、なつめの膝をゆっくりと開かせた。ショーツが引き下ろされて、下半身が完全に露わになる。なつめは両腕で顔を覆った。

「ひっ……」
(見られてる……っ、三人の先生に……おまんこを……)
「では、視診から始めます」

三人の視線が、なつめのおまんこに集中した。じつくりと、余すところなく見られている感覚がある。なつめの体が、反射的にじんわりと熱くなり始めた。

「……クリトリスが少し赤いですね」

真人先生が穏やかな声で所見を述べる。光先生がタブレットに何かを打ち込みながら頷く。

「炎症ではなさそうです。充血ですかね」

「触診しますね」

真人先生の大きな指が、なつめのクリトリスにそっと触れた。

むにゅ♡と柔らかな感触が伝わる。

「ひっ……♡」

「クリトリスへの刺激で痛みはありますか？」

「い、痛くは……ないですけど……」

「では続けますね。力を抜いて♡」

真人先生の指がゆっくりとクリトリスを撫で回す。

むにゅ♡ むにゅ♡ こり♡ こり♡